

任意団体「ありがとうからはじめよう！」

南相馬市

須藤 栄治 つながろう 南相馬！

取材日 2012.09.14

支援していただいたすべての人へ“ありがとう！”の気持ちを伝えるとともに、みんなが手を取り合いつながることで郷土の誇りを取り戻し、一度は人がいなくなった街を感謝の気持ちが溢れる街に変え、活気ある街を取り戻すため情報発信することでふるさとを再生していきます！をスローガンに、南相馬で復興支援活動を行なっている。

3月11日 14時46分

経営している店の開店準備をしている時に地震が起きた。その大きさに驚いて思わず店の外に出た。近所の人たちもみんな外に出ていた。収まったかなと思いきや店の中に戻ると、再び大きな揺れが来た。お酒のボトルは棚から落ちて割れていた。すぐに近所のお店はどうなっているのか様子を見に行った。ある店のテレビの画面に映し出されていた津波の映像を見て「これはただごとではない」と思った。

この周辺はもともと強固な地盤ということもあり、電気、水道、ガスなどのライフラインにダメージはなかった。自宅は山側に近い方なので津波の被害もなく家屋も幸い無事だった。

当日は店に予約が入っていたが、この地震の影響でお客さんは来ないだろうと思っていた。近所の焼き鳥屋さんは、「うちではボトルが1本しか割れなかったから営業するよ。」と言っていた。予約時間の7時まで待って、お客さんが来ないことを確認して自宅へ戻った。それからはテレビにかじりついて震災のニュースに見入っていた。

つながろう南相馬

3月14日に3号機が爆発した後、母と一緒に会津若松で避難生活をした。出かける所もない缶詰状態で、流れてくる情報は原発の状況ばかりで、先行きがどうなるかわからなかった。2週間ほどで「何もしていない状況」に耐えられなくなった。南相馬市は原発から30km圏内のため、支援物資が届かないというニュースが流れ、テレビでは市長や近所の病院の院長が支援を要請していた。身近な人が地元で頑張っているのを観て、自分も何かしたいと思い3月下旬に南相馬へ戻った。店の後片付けをしていると、大町病院の看護師長さんが訪ねてきた。「病院が4月4日に再開する。みんなで食事会をしたいので、その日にお店を開けて欲しい。」と言う。この日に合わせてお店の再開を決意した。



一生懸命頑張っている人たちに感謝の気持ちを何かしらの形で表現したいとずっと考えていた。「ありがとうからはじめよう！」というキャッチフレーズを考え、地元でクリーニング店を営む高橋さんと一緒にのぼりを作ることを決めた。デザインはすべて友人のデザイナーが担当し、最初の活動資金は高橋さんに提供していただいた。のぼりは当初サンプルで5枚作り、そのあと400枚を作って地元の商店街に買ってもらい、掲げてもらった。チャリティーライブの開催や、現場の声を外に伝えるという趣旨で東京や静岡で南相馬市の現状を話す活動も行なった。

原発事故を受けて

自分が生まれた時には既に近くに原発があった。既にできてしまっている原発は稼働していようがいまいが、完全に無くしてしまわない限り危険性は変わらない。原発問題は多岐にわたっていて複雑だが、今後をどうするのが問題だと思っている。補償だけではなく、語り継ぐべきものや次の世代に何を残すのが大事だ。人がどう生きるかということを問われている。その部分は大事にして、発信していかなければならないと思う。震災が起きて原発事故が起きて、人と人とのつながりの大切さ、コミュニティの大切さ、家族の絆、

助けてくれる人がいること、選択することの自由がある幸せなど、どこの地域や国に行っても通じることや気づかされたと思う。今年の6月にリオ+20に参加させてもらった。そこで活動の報告を行ない、皆さんにとって幸せとは何でしょうかと問いかけた時に「人と人とのつながり」という答えが返ってきた。それは宗教や人種が変わっても共通の答えだった。

3.11を振り返って

色々な意味で価値観を問われていると思う。政治的プロセスは政治的プロセスとしてやらなければいけないが、民間でできることは民間で、自分たちでできることは自分たちでという流れを作り、必要なところは政治家やNPOなどの協力を得て、行政の理解を得ながら協働していく、そうした循環を作るための仕組みが必要なのかなと思う。そうでなければ各地域によって異なる問題にも対処できず、ニーズに合わないものになる。自分たちに何が必要なのか、ダイアログ等の場で話し合い、発信していく時代になってきたと思う。今、南相馬にいて感じることは、情報が早く、外部から人が入って来ていろんな刺激を受けているということ。他ではなかなか実現できないことがここでは簡単にできたりする。すべてが壊れ、ある意味で国に見放された部分もある。行政に頼ってばかりいないで、自分たちでなにかやらなければと動いている人が多い。市民活動が広がり、いろいろなものをもう一度作り上げられる、ここじゃないとできないことをやっていける場所でもある。そうした強みを活かしていきたい。

これからの課題

若い人が動いていないし、活動の場が無いと思う。いままでの活動でも同じで、外で原発の状況を訴えるのも大事だと思うが、それだけでは人を惹き付けたり、メッセージを届けるのは厳しいのではないだろうか。

自分たちにこれから何ができるか、若い人たちと何かできることはないのかと、新しいことを始めようと動き出したが、そこに参加する人の平均年齢、復興会議に参加する人たちの平均年齢は高い。どこに行っても同じだと思う。被災地では若者が外へ流出してしまっている。そこには若者が夢を見られない現状がある。

一方で、復興ライブを開催すると多くの若者が参加している。そのエネルギーをどうにかして町づくりや復興会議のような場所に出せないかと考えている。話をしてみるとみんな熱い思いを持っている。気持ちを持った若者たちの受け皿や、発信

する場が無いというのは問題だ。若者たちをつないで声を発信する場を作っていけたらと思う。リオ+20の最終日の分科会で、「世の中の半分は若い人たちだから若い人たちがメッセージを発信していかないと持続可能な社会は作れない」と、参加した25か国の全員が言っていた。人種や宗教が異なっても同じ考えを持っているのだなと思った。

どこへ行っても過疎化・高齢化が進んでいて、これからは若い人たちに頑張ってもらわないとだめだと言われる。しかし、若い人たちを育てる環境が無いように思う。専門家たちが、上からものを言ってもなかなか若い人には響かない。専門家たちが常に周りにいて、若い人たちのビジョンを建設的に応援してくれるような仕組みがあればいいと思う。

これから

今行なっているのが無線塔空想局というプロジェクトだ。無線塔が無くなってから今年で30年になる。年配の人にとっては出かけて帰ってきた時に無線塔が見えると故郷へ帰ってきた気持ちになる、原町のシンボルだった。30年前は子どもたちもいっぱいいたし、町にも活気があった。原発の事故について聞くと、「元に戻ればいい」という答えが多く返ってくる。当時の様子を聞くと顔が輝き出す。何かをやりたいんだというメッセージを集めて、自分たちで発信しながら、形にしていくヒントを作れないかと動き始めている。



撮影：2012.6.20～22 ブラジルのリオデジャネイロにて開催された国連持続可能な開発会議（リオ+20）